OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	行為と進行形表現
Author(s)	柏端, 達也
Citation	年報人間科学. 1999, 20-1, p. 15-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10244
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

行為と進行形表現

柏端　達也

〈要旨〉

行為の生起の期間内であるかどうかが、対応する動詞の進行形の適用可能性によって決まるという図式は、受け入れられやすいものであるが、素朴にすぎる。行為と進行形表現の間の意味論的関係は、そうした図式が示唆するよりずっと複雑である。この論文では、表層的には区別されないひとつの動詞の進行形を、含意関係や論理形式の観点から、(1)傾向性用法、(2)行為の持続を表す他動的完遂動詞としての用法、(3)行為の持続を表す計画動詞としての用法という、三つの用法に分類する。それらの用法の区別は、行為の時間的特定の問題や未完了形のパラドックスといった、行為論および意味論の重要な問題に対して、有益な洞察を与えてくれるだろう。

キーワード

行為　進行形　殺害の時間　未完了形のパラドックス

1. 行為の生起の時間

正確にいつある行為をなしたのかを考えはじめるといろいろとやっかいな問題が生じることは、すでにG・E・M・アンスコムが古典的著作『インテンション』の中で、かなり明確なかたちで指摘している。

「次のように問うたとしよう。「われわれの例の男はいつ彼らに毒を盛ったのか。」こう答える人がいるかもしれない。「彼らが毒を飲まされているあいだずっとだ。」だがこのケースでは次のように言う人がいるだろう。「じゃあ、その男が毒を盛ることは行為ではない。なぜなら、住人が毒を飲んでいるどの時間にも、男は関連することをおそらく何もしていないから。」とすると「男が彼らに毒を盛ったのは正確にはいつか」という問いには、男が毒を投入している無数の時間のすべてを特定することによって答えるべきだろうか。しかしそれらの時間のいずれも、それ自体としては毒を盛ることと呼べるようなものではないだろう。いったいどうすれば、現在の男のポンプ操作を、毒を盛るという意図的行為と呼ぶことができるのか。あるいはわれわれは次のように結論しなければならないのだろうか。すなわち、男はいかなる時間においても彼らに毒を盛ってはいない。彼らが毒を盛られている時間に、男は毒を盛ることに従事していなかったのだから。」[1]

ここでアンスコムは、「毒を盛る（poison）」を、毒を投入しその毒を被害者が飲むことが適用の条件であるような動詞として使っている。もしその含みが日本語の「毒を盛る」では明瞭でないと言われるなら、たとえば「時限爆弾を爆発させる」を考えてみればよい。爆弾が爆発した時点で、爆破犯は爆破に関連することを何もしていないかもしれない。爆破犯は正確にいつ爆破の行為をなしたのか。そして同様の問題は、あきらかに、行為が正確にどこで行なわれたかを考えたときにも生じるだろう。

こうした問題は、きわめて自然に出てくるものなので、おそらくアンスコムのような哲学者が気にしはじめるずっと以前から、あるレベルの厳密さが要求される実践的な場面では問題になっていたものと思われる。たとえば、R・ヒルピネンが紹介している戦前の（ひとつは前世紀の）例であるが、ニューヨークで殴打された被害者がニュージャージーで死亡した事件について、ニュージャージー州の裁判所は、犯行が州外でなされたという理由で被告の裁判権を放棄したのだが、しかし類似のケースに対しノースカロライナ州の裁判所は、犯行が州内でもなされたという理由で、逆の判断を下した。このような「不一致」は、法的判断はできるだけ首尾一貫しているべきだと考える法学者たちによって、当然のごとく問題視されてきたのである[2]（このことは、哲学におけるこの問題の例に犯罪の匂いのするものが多いということと、関係があるかもしれない。）

行為が正確にいつどこで生起したかという問題に対し、哲学者た

ちはおのおのの理論を背景に、たがいに両立しないさまざまなことを述べあってきた。そもそも行為が時空間的に特定可能な存在者であるという前提のもとでは、すくなくとも二つの代表的な立場がある。ひとつはニュージャージー州の裁判所のように、毒を盛る行為が、毒を投入したりポンプを操作するための手や腕の動きに時間的、空間的に限られると考える立場であり[3]、もうひとつはノースカロライナ州の裁判所のように、毒を盛るという行為が、住人が毒を飲むという結果までをも時間的、空間的に含んでいると考える立場である[4]。

後者の立場に対する反論のひとつとして次のようなものがあげられる。すなわち、行為が結果までを時間的に含むのだとすると、毒を投入しポンプを操作し終わったあとも毒を盛るという行為は持続しているはずであり、それゆえ住民が毒を飲むまでのあいだ男はどこで何をしていようともずっと毒を盛っていることになってしまう、という反論である。あるいは、こちらの例で述べた方が劇的かもしれないが、時限爆弾をセットしたあと爆発するまで爆弾犯はずっと爆発させていることになってしまう、という反論である[5]。「ずっと毒を盛っている」、「ずっと爆発させている」といった表現の不自然さに訴えるこうした議論は、しかし、美濃正によれば「進行形を用いることが自然な場合にその使用を禁じるという望ましくない帰結」を逆にもつことになる[6]。結果が出るまでに時間と手間がかかる行為を考えてみよう。たとえば溶けにくいチーズを完全に溶かしきらなければならないとする。そのチーズはおそろしく溶けにくいのだが、不思議なことに長時間加熱すれば焦げつくこともなく確実に溶けきるので、チーズのかたまりを鍋に入れコンロに火をつけたあと、すこしくらいなら現場を離れてもかまわない。そこで鼻唄を歌いながら隣の部屋に行きテレビを観ることにする。さてこのとき、鼻唄を歌っていようとテレビを観ていようと「いまチーズを溶かしているんだ」と自然に言えるのではないだろうか[7]。

こうした議論に対するきわめて健全な見解は「不自然な場合があるからすべていけないとする議論も、自然な場合があるからすべてよしとする議論も、ことがらをまったく半分しか見ていない」[8]というものである。つまり、日常言語における進行形の使用を、行為が持続しているかどうかを判定するために使える確固とした一枚の岩盤のようなものと考えることが、おそらく問題なのである。とはいえ、確固とした一枚の岩盤が存在しないということから岩盤らしきものが一枚も存在しないと結論することもまた早計である。本稿における私の見解は、進行形がいかなる「理論」も扱いえないほど個別的で曖昧な使用をもつというのではなく、むしろ明確に区別される複数の用法をもつ、というものである。

進行形の用法の複数性は、次のようなケースによく表れていると思う。A氏とB氏がいっしょに食事をしており、A氏が「いま論文をひとつ書いているので忙しいんです」と述べたのに対して、B氏が「え、君はいまハンバーグを食べているのではないのかね」と返したとしよう。もしそれがB氏のつまらない冗談でないとすれば、彼はたぶん進行形の用法を部分的にしか理解していない。B氏は誤

ったことを述べたわけではない。A氏はそのときたしかにハンバーグを食べていたからである。したがってB氏はある意味で正しい。だが、ハンバーグを食べているまさに最中にも「いま論文を書いている」と述べることを可能にするような進行形の用法があることもたしかである。それゆえにA氏の言うことは別の意味で完全に理解可能なのである[9]。

A氏の発言に見られる進行形の使用は、すくなくとも次の二つの点で注目すべきである。(1)まずA氏は、発話の時点で、一般に論文を書いていると見なされるようないかなる動作もしていない。これは、論文を書くのには無限にさまざまなやり方がある（それゆえハンバーグを食べているように見えるがじつは論文を書いている）というのとは事情が異なる。彼は論文の執筆に関連することを文字どおり何もしていないのである。にもかかわらず、B氏が理解していないある意味において、そのとき風呂に入っていようと眠っていようとA氏は論文を書いている[10]。その進行形の使用を可能にしているものはいったい何なのだろうか。(2)さらに、A氏の書いている論文はけっきょく完成しないかもしれない。そして論文が書かれなかったとしても、「いま論文を書いている」というA氏の発言があとから間違いであったとされることはない。A氏は論文を書いていたけれども書けなかったのである。論文を書くという行為は、論文が書かれる、すなわち論文の完成という結果によって特徴づけられるように思われる。論文を書いたとすれば論文が書かれたのである。しかし、行為が進行形のアスペクトで表現されると、その含意が失われてしまうことがあるようである[11]。これはいかなる事情によるものだろうか。

進行形表現にまつわる以上の二つの論点について、本稿では、意味論的もしくは哲学的な説明を与えることを試みたい。哲学的観点からすれば、私はニュージャージー州の裁判所の判断が正しかったと考えている。結論を先回りして言うなら、第一の論点に対して本稿が与える説明は、なぜ隣の部屋でテレビを観ながら「いまチーズを溶かしている」と述べることが可能であるかの、行為の持続を前提としない説明になるであろう。また第二の論点に対して与える説明は、行為をより後に生起する出来事によって特徴づけることに対する、けっきょくのところ、擁護になるはずである。

2. 行為への傾向性

まず進行形については一般的に次のことが言える。すなわち、ある時点で何かをしているということは、その時点を含むより長い期間にわたって持続する何らかの出来事、過程、もしくは状態の存在を前提とする[12]。より短い時間領域を含むことができない仕方で時間的に特定されるタイプの出来事（たとえばゴールラインへの到達）は、そのため、対応する進行形表現をもつことができない。逆に、一定の期間持続する出来事や状態や過程は、その期間内の任意の時点について、対応する進行形の適用が可能である。そこで、「AGENTがTIMEにφしている」という形の表現を「φしている

(AGENT, TIME)」と記号化するならば、任意の行為者 AGENT、時点 TIME、動詞 φ について[13]、次のような双条件式が成り立つだろう。

[1] φ している(AGENT, TIME) ⟷ (∃e)(∃t_1)(TIME⊂t_1 & (∃t_2)(TIME<t_2 & t_2⊂t_1) & φする(AGENT, e, t_1))

(関係語「TIME$_1$⊂TIME$_2$」は、TIME$_2$がTIME$_1$を真部分として含むという意味であり、「TIME$_1$<TIME$_2$」は、TIME$_2$がTIME$_1$より後の時間領域であるという意味である。もちろん「t_n」は時間領域を値にとる変項であり、また「e」は、出来事や過程や状態といったカテゴリーに属する存在者を値にとる変項である。右辺の第二連言肢は、TIME時が、AGENTがφするという出来事や過程や状態の時間的に最後の部分ではないということを表す。それは、φしている時間の中にφし終わる時点は含まれるべきではないという直観を反映したものである。この[1]は、従来の代表的な進行形の規定と基本的な精神を共有しているが、右辺に出来事といった存在者への量化を含む点で特徴的である[14]。出来事への量化ということに関連して一点だけ注釈を行ないたい。右辺の「t_1」は、φするという出来事や過程や状態が正確に占める時間領域を表す。そのため三項述語「φする(AGENT, EVENT, TIME)」を「AGENTがTIMEにφするというEVENT」と読むのはミスリーディングである。「~に」という日常表現によってわれわれは、ふつう出来事の生起の時間よりも広い時間領域に言及するからである(引っ越しが火曜日の午前中に終わっても「火曜日に引っ越しした」と言うことができる)。そのような、出来事をより広い時間領域と関係づける述語としては、別に「開に(EVENT, TIME)」を導入すればよい。)

では前節の例に関して、A氏が事実論文を書いているとして、いったい何が持続しているのだろうか。A氏がハンバーグを食べているということに対応して何が持続しているのかは比較的明瞭であり、それはハンバーグを食べるというA氏の行為である。その行為は、A氏がスモールライトの消し忘れに気づいて駐車場に行っている間は中断し、ナイフとフォークを置いて口の中の最後のハンバーグを飲み込んだときに終了する。だがA氏がそのとき論文を書いているということに対応して持続するものは、私の考えでは、行為とは別のカテゴリーである。例の状況は行為が並列してなされているケースではない。A氏について「ハンバーグを食べながら論文を書いている」と述べることも「論文を書きながらハンバーグを食べている」と述べることも、思うに正しくない(それらの表現はむしろハンバーガーが適切であるような別のせっぱ詰まった状況に対して適用されるべきである)。

「A氏は論文を書いている」と述べるために、存在することがまず必要とされているのは、あるタイプの行為を遂行しようとするA氏の傾向性が持続するという状態である。つまりもしA氏に論文を書く気がそもそもなく、「いま論文を書いている」という発言の前後

においていかなる状況になっても、論文の執筆に関連するとA氏が考える行為（すなわち、これをすればまさにいま論文を書いていることになるとA氏が考える行為）を遂行することがないとすれば、A氏のその発言は偽である。つまりその場合A氏は、論文を書くという行為への傾向性をもっていないのである（「論文を書くという行為への傾向性」は、「論文の執筆に関連するとA氏が考える行為を遂行する傾向性」のより簡潔な代用表現である）。

論文を書くという行為への傾向性は、まさに傾向性の一種である。それは、持続する期間内の任意の時点で「いまが適当な機会だと思えばA氏は論文の執筆に関連すると考える行為をするであろう」という（単なる実質含意を表すのではない）条件文を成り立たせるような、実在するA氏の状態である。たしかにこのタイプの傾向性には、水溶性や割れやすさにはない特有の捉えがたさがある。すなわち「適当な機会だと思えば論文の執筆に関連すると考える行為をするであろう」という表現の仕方がすでに示すように、このタイプの傾向性は、(1)A氏をとりまく状況がどうなれば顕在化するのか外延的に述べることがいちじるしく困難もしくは不可能であり、(2)われわれが何をその顕在化と見なせばよいのかに関しても同様の困難があるように思われる。また、(3)行為への傾向性を実現するカテゴリカルな状態（または過程）がいかなるものであり、当の傾向性をもつという状態とどのような関係にあるのかに関して、混み入った哲学的問題が生じるであろう[15]。

以上のうちの第二の問題点については第6節でふたたび触れることにする。第三の問題はあきらかに本稿の主題の範囲を越えており、ここで積極的な答えを出すことはできない。ただ次の二点を強調しておきたい。まず（結晶の構造といった）静的な状態ではなく刻一刻と変化する（たとえば脳細胞の活動の）過程によって実現されているということは、実現されているそのものがまさしくひとつの傾向性であるということを論駁しない。そして、あるタイプの行為への傾向性をもつという状態が、いかなるカテゴリカルな状態や過程ともタイプ的に同一でなかったとしても、前者が後者である可能性が否定されるわけではない。また、顕在化のための条件に関する第一の論点について言えば、その論点を、このタイプの傾向性が明確に特定可能な〝入力〟をもたないことを示すものと捉えるべきではない。適当な機会であると気づくことは、A氏の内部で起こる心的出来事であるが、それ自体を傾向性が顕在化するための〝入力〟と見なしてならない理由はない。

興味深いことに、行為への傾向性をもつという状態は、別の（対になる）傾向性をもつという状態としても記述可能である。たとえば、論文を書くという行為への傾向性をA氏がもつなら、論文執筆の妨げになるとA氏が思う出来事（参考文献の紛失やコンピュータの故障など）が生じたときにA氏はしかるべき対応を試みるであろう。すなわち、あるタイプの行為への傾向性をもつ人は、その顕在化の妨げになるようなことを取り除く行為への傾向性をももっているのである。この現象こそ、野矢茂樹が「可能な障害と調整の物語」や「可能的行為への構え」といった言葉でもって指摘しようとした

ものにほかならない[16]。この点に関する野矢の指摘はほとんど正しいと思われるが、可能的行為への構えの持続を行為の持続と同一視するかのような議論だけが、私には受け入れられない。ある傾向性をもつという状態は、その傾向性の顕在化と、カテゴリー的に区別されるべきである。可能的水溶への傾向があるという状態とその顕在化である水溶という出来事が同じでないように、可能的行為への構えをもつという状態とその顕在化である行為の遂行は同じではない。つまり、進行形にすくなくとも二つの用法があり、それらはカテゴリーの異なる存在者の持続を前提しているのである。

ここで、行為への傾向性をもつという状態の持続を前提とした進行形の用法を、行為の持続を表す進行形の用法と区別して、「傾向性用法」と呼ぶことにしよう。そして傾向性用法における進行形を「φしている$_{dsp}$(AGENT, TIME)」という述語で表記し、行為の持続を表す進行形の述語「φしている$_{act}$(AGENT, TIME)」と区別することにしよう。

すると、前節の例におけるA氏の発言は、時間に関する指標子「いま」を導入して、次の［2］のように記号化でき、またB氏の発言の最初の感嘆詞の部分は［3］のように記号化できるだろう。

［2］論文を書いている$_{dsp}$(A氏, いま)

［3］～論文を書いている$_{act}$(A氏, いま)

このように解釈するなら、A氏の発言とB氏の発言は両立可能である。

さてここで［2］に関して［1］を適用すれば、次の双条件式を導き出せる。

［4］論文を書いている$_{dsp}$(A氏, いま) ⟷ $(\exists e)(\exists t_1)(いま\subset t_1 \,\&\, (\exists t_2)(いま \prec t_2 \,\&\, t_2 \subset t_1) \,\&\, 論文を書く_{dsp}(A氏, e, t_2))$

右辺の第三連言肢「論文を書く$_{dsp}$(A氏, e, t_1)」における「e」にあたるのは、たんに、論文を書くという行為への傾向性をもつというA氏の状態そのものではない。私の考えるところ、右辺の第三連言肢が述定しているのは、日常的には「論文を書くという計画に従事すること」とでも表現できそうな、出来事と状態の融合体である。それは次に述べる直観があるからである。

つまりかりにA氏に論文を書く気があっても、「いま論文を書いている」という発言の以前に（正確には、発言より前か発言と重なる時間に）、論文の執筆に関連すると考えるような行為をまったくしていないならば、A氏のその発言は正しくないと思われる。その場合はむしろ「まだぜんぜん手をつけていない」と言うべきであろう。ようするに進行形の傾向性用法は、その適用条件として、対応する傾向性が持続していることを必要とするだけでなく、その傾向性がすでに一度は顕在化していることを必要とするのである。そしてさらに第二の条件として、その顕在化はある適切なタイプの出来事でなければならない。論文の執筆に関連するとA氏が考えて遂行した

行為は、まさに論文を書いていると見なすことのできる行為でなければならない。薬物の影響で無意味な模様を書きなぐっている人は、いくら当人が論文を書いているつもりであっても、論文の執筆に関連することをしてはいない。以上の直観を尊重し、私は、例の状況に関して次の同値関係が成り立っていると主張したい。

[5] 論文を書いている$_{dsp}$(A氏, いま) ⟷ (∃e)(∃t_1)(∃t_2)
(いま⊂t_1 & (∃t_3)(いま<t_3 & t_3⊂t_1) & 論文を書くという
行為への傾向性をもつ(A氏, e, t_1) & t_2⊂t_1 & ~(いま<t_2)
& 論文を書いている$_{act}$(x, t_2))[17]

(右辺の第三連言肢の述語表現はあきらかに未分析な要素を含んでおり、さらに第三連言肢と第六連言肢の関連性もここにはまったく示されていない。論文を書いていると見なすことのできる行為をA氏が行なったとしても、それが問題となっているA氏の傾向性の顕在化であるとはかぎらないからである。つまり、第三連言肢で述定されている状態と第六連言肢が前提としている行為との間に、傾向性とその顕在化という関係があるのかどうかは、[5]の右辺の形式だけからは分からない。しかしながら、A氏に論文を書く気があり、かつそれとは無関係に論文の執筆に関連すると見なされる行為をすでにA氏が行なっている場合に、知らないうちにすでに書き始めているという意味で「A氏はいまもう論文を書いている」と述べることができるなら、右辺は左辺にとって十分である。)

一般的に言えば、傾向性用法における進行形が用いられた述語「φしている$_{dsp}$(AGENT, TIME)」は、次のように規定される。すなわち任意の行為者AGENT、時点TIME、動詞φについて、

[6] φしている$_{dsp}$(AGENT, TIME) ⟷ (∃e)(∃t_1)(∃t_2)
(TIME⊂t_1 & (∃t_3)(TIME<t_3 & t_3⊂t_1) & φするという
行為への傾向性をもつ(AGENT, e, t_1) & t_2⊂t_1 & ~
(TIME<t_2) & φしている$_{act}$(AGENT, t_2))

(表記を統一するために「行為者(AGENT)」の語を使ったが、傾向性用法における「AGENT」は、行為することが可能な主体という程度の意味にすぎない。行為可能な主体であるということは、もちろん、いま行為している主体であるということを含意しない。)

見てあきらかなように[6]の右辺は、

[7] φしている$_{act}$(AGENT, TIME)

を含意しないし、もちろん[7]の否定も含意しない。このことは、「φしている$_{dsp}$(AGENT, TIME)」が成り立つ時間領域が、「φしている$_{act}$(AGENT, TIME)」が成り立つ時間領域に関して不連続でありうる、ということを意味する[18]。それは、傾向性はつねに顕在化していなくてもよいというあたりまえの事実に存している。もちろん、傾向性がつねに顕在化しているということは可能なのだが、そ

の場合でも傾向性をもつという状態とその傾向性の顕在化は概念的に区別されなければならない。

この節の教訓を簡単に述べればこうである。進行形が正しく適用可能であるということは、とにかく、行為が持続していることの証拠にはならない。日常の用法を注意深く眺めれば、行為への傾向性の持続を前提とした、別のより複雑な（つまり［6］で規定されたような）適用条件をもつ進行形の用法が存在することが分かる。

3. 完遂動詞と他動的動詞

行為の時間的な特定にとって問題となる「毒を盛る」、「チーズを完全に溶かしきる」、「論文を書く」といった動詞（句）は、Z・ヴェンドラーの古典的でよく知られた動詞の分類に従えば、どれも「完遂（accomplishment）」動詞である。ヴェンドラーの完遂動詞の特徴づけは、「もしある人が一マイル走るのを途中でやめたなら、彼は一マイル走らなかったのであり、もしある人が円を描くのを中断したならば、彼は円を描かなかったのである」という一節に示されている[19]。ここでは完遂動詞を、同じことであるが、進行形と完了形を使ってさしあたり次のように規定しておきたい。

［8］「AGENTがϕする」における動詞「ϕする」が完遂動詞であるのは、一つの動作に関して、AGENTがϕしている最中であるということが、AGENTがその時点ではまだϕしてしまっていないということを含意するときであり、そのときにかぎる。

たとえば円をすでに描いてしまったとすれば、「その円をいま描いている最中である」と言うことはできない。それゆえ「円を描く」は完遂動詞である[20]。

完遂動詞は行為の終着点や結末によって行為を特徴づける動詞である、と述べることもできる[21]。ところで私は別の箇所で、行為の結果から行為を再記述する動詞として「他動的動詞」を導入した。すなわち、

［9］「AGENTはOBJECTをϕした」における動詞「ϕした」が他動的であるのは、「AGENTがOBJECTをϕしたこと」と記述可能なAGENTによる行為が存在し、かつ「OBJECTがAGENTにϕされたこと」と記述可能な出来事がOBJECTに起こり、かつ前者が後者をひき起こしたときであり、そのときにかぎる[22]。

あるいはこの［9］は、完遂動詞をより意味論的な観点から規定しなおしたもののように見えるかもしれない。だが完遂動詞と、［9］によって規定される他動的動詞は同じではない。たとえば「台車を押す」は他動的であるが完遂動詞ではないし、また「十メートル歩く」は完遂動詞であるが他動的動詞ではない。

さて、ヴェンドラーが分類した別のタイプの動詞、「活動（ac-

tivity)」動詞に関しては、冒頭にあげたような時間的特定の問題は生じない。活動動詞とは、ある時点でϕしている最中であるということがその時点ですでにϕしてしまっているということを含意する動詞のことである[23]。たとえばある時点で大声を出しているならば、その時点ですでに大声を出してしまっている。それゆえ「大声を出す」は活動動詞である。大声を出している人は、まさに大声が出ているときにそれに関連したことをしており、したがって「いつ大声を出したのか」という問いには、大声が出るような仕方で声帯を震わせている無数の時間のすべてを特定することによって答えることができる。

大声が出るという出来事をある種の空気振動の発生と解釈するならば、「大声を出す」は他動的な動詞である。つまり他動的動詞が使用されているからといって、ただちに行為の時間的特定の問題が生じるわけではない（ただし空間的な特定は問題になるだろう）。他方「十メートル歩く」は完遂動詞であるが、十メートル歩いたという行為の時間的特定に関しても、やはりそれほど問題はない。十メートル歩くのに七秒半かかったとすれば、その七秒半が占める時刻を答えればよいからである。よって、行為の時間的特定の問題が生じるのは、他動的な完遂動詞が用いられるときであると言うことができる。

4. 因果的に関与しない部分

第2節では、行為の持続を前提としない進行形の使用を区別した。厨房の隣で鼻唄を歌いながらテレビを観ている人物は、私の考えでは、その時間にチーズを溶かすという行為を遂行していない。だが彼は、チーズを溶かすという行為への傾向性はもっており、その傾向性をもつかぎり、ある意味でチーズを溶かしている（すなわち、チーズを溶かしている$_{dsp}$（彼，その時間））のである。だが、そのような傾向性用法を分離するだけですべてが片づくというわけではない。まさに行為を遂行しているということを表すのに用いられる進行形についても、とりわけそれが他動的動詞や完遂動詞の進行形である場合には、考察すべき微妙な論点が存在する。本節では他動的動詞に関する比較的特殊な問題を論じ、次節で完遂動詞に関するより広く知られた問題を取りあげたい。

狙撃の数時間後に標的が死亡する例（これもまたおなじみの例である）に関して、野矢が新たなヴァージョンを提出している。野矢の例に登場する狙撃者はきわめて念入りである。つまりその狙撃者は、狙撃の後も、救急隊が自分の標的を助けに来るのを阻止しようと待ちかまえているのである。だがけっきょく救急隊は来ることなく、標的は死んでしまう[24]。このケースについては次のように言うことができると思われる。物陰に身を隠し、救急車がやってくるかもしれない方向に目をこらすという狙撃者の行為（それはたしかに

行為である）は、標的の死に因果的に関与していない。しかも狙撃者は、ライフルを片手に救急車を待ちかまえているあいだ、あきらかに殺害に関連する行為を遂行していたのであり、標的殺害への傾向性をもちつつ別のことをしていたわけではない。ようするに、殺害に関連するにもかかわらず標的の死に因果的に関与しない行為が存在するわけである。この事例は、「標的を殺害する」を他動的な動詞と見なし、殺害の行為を死をひき起こす行為として特徴づけるアプローチに対し、難問を突きつけるのだろうか。

ところでこの狙撃者の例には、特別に考慮すべき点があると考えられるかもしれない。たとえばじっと待つことはどのような意味で身体運動と言えるのだろうか。もしこの狙撃者が救急隊の到着を妨害したとすれば、そのことはどのような仕方で標的の死の生起に関わるのだろうか。だがそれらの問題は本稿の中心課題ではない。別の、より典型的な身体運動や因果関係を含む例を考えれば、野矢の指摘した論点がきわめて一般的なものであることが明確になる。

本質は次のような例でも変わらないであろう。ある男が、庭の北側から殺虫剤を撒いていき、庭全体に殺虫剤を撒き終える。そしてそのあと地面をどんどんと踏みつけている。その後、庭のアリは全滅する。その男がアリを全滅させた、すなわちアリを駆除したのである。アリの全滅の原因は男の行為である。

さて、ここで、アリの全滅の原因はさらにこまかく見るならば次のようであるとする。すなわち庭の北半分にアリの巣は一つもなく、殺虫剤が撒かれたとき庭の北半分にはたまたまアリが一匹もいなかった。さらにアリの巣はかなり深かったので男が地面を踏むことによって巣は何の影響も受けておらず、男に踏まれたアリもいなかった。ようするに、殺虫剤の庭の北側への散布（したがって散布の時間的前半部分）と、男による地面の踏みつけは、アリの全滅に対し因果的にまったく関与しなかった。

確認するが、これはきわめて一般的な事態である。われわれはあることを実現するためにさまざまなことを為し、うまくいけばそのことが実現するのであるが、そのさい実現のために為したことの正確にすべてが因果的に不可欠であるようなケースは、まれである。われわれはふつう必要以上のことをするのである。

男の一連の行為は、そのように因果的に不必要な部分を含むのであるが、にもかかわらず全体としてアリの全滅をひき起こしたと言うことができる。これはすこしもおかしな言い方ではない。台風8号が裏山の土砂崩れをひき起こしたとしても、台風8号という出来事のすべての部分がその裏山の土砂崩れの生起に必要であったということにはならない。原因が不必要な部分を含むというのはごく自然なことである。しかし他方、もし男が、庭の南端まで殺虫剤を撒き終えてから地面を踏みはじめるまでの間に郵便受けに夕刊を取りに行っていたとすると、その夕刊を取るという行為までをもアリを全滅させるという行為の一部に含めるのは、適当でない気がする（ここでは夕刊を取りに行く途中で一匹のアリも踏んでいないと仮定している）。夕刊を取るという行為と殺虫剤の散布等の出来事の融合体を考え、それ全体がアリの全滅をひき起こしたと述べることが論

理的に問題なのではない。そのような融合体を想定すべき文脈を、いまのところ思いつけないのである。

対照的に、殺虫剤の散布と地面の踏みならしをまさに一連の行為と見なすための根拠は存在する。それらの行為は次のようにして明確に切り出すことができる。たとえば殺虫剤を撒き始めた男に対して「なぜ薬を撒くのか」と問うたなら、「アリを駆除しようと思って」と答えるであろう。もちろん殺虫剤を撒き終えようしているときにそう問うても同様の答えが返ってくるはずである。また、地面をどんどんと踏みつけているときに「なぜ」と問うた場合も、男は「アリを駆除しているんだ」などと答えることだろう。つまり、男による殺虫剤の散布と地面の踏みつけは、アリを駆除するという目的で為されたという点で、共通に特徴づけることができる。行為の因果説を前提とした語り方をするならば、それらの一連の行為の各部分はアリを駆除したい、全滅させたいという欲求を共有する一つの理由によってひき起こされていることになる。だが「なぜ郵便受けの方に歩いていくのか」という質問に対して、男は「アリを駆除しようと思って」とはけっして答えないだろう。共通の意図をもつということが、諸行為の融合体を考えることに対しもっともな根拠を与えるのである。

野矢の例に戻れば、ライフルの引き金を引くという狙撃者の行為と、救急隊が来ないか待ちかまえているという行為は、標的を殺害しようという意図（標的を殺害したいという欲求を共有する一つの理由）によってひき起こされたという点で、共通に特徴づけられる。そしてそれらの行為を「標的の殺害という意図で為された行為」の名でひとくくりに呼ぶことは自然である。標的の死はまさに、標的の殺害という意図で為された行為という一つの融合体がひき起こしたものである。たしかにその融合体は因果的に不必要な部分を明白に含んでいる。救急隊を待ちかまえること（不必要な部分）を、それ単独で、死をひき起こした行為すなわち殺害と見なすことは誤りである。だが、引き金を引くことと救急隊を待ちかまえることの融合体を殺害の行為と見なすことは、引き金を引くことを殺害と見なすことと同様、まったく可能である。

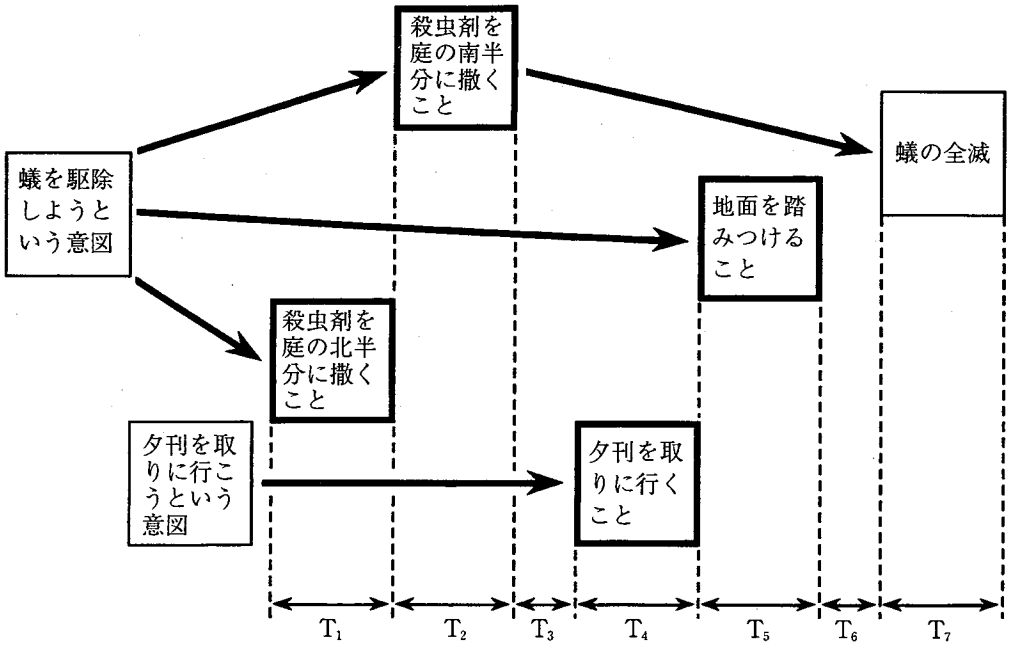
（以上の議論は次の二つの重要な帰結をもつ。(1)従来、「φする」が完遂動詞である場合は、φするという出来事のいかなる時間的部分もφするというタイプの出来事ではない、としばしば主張されてきた[25]。だが以上の議論は、行為に関して、かならずしもそのように考える必要のない存在論的立場が可能なことを示しているように思われる。すなわち、引き金を引くことと救急隊を待ちかまえることの融合体である一連の行為は「殺害」であるが、その時間的真部分である引き金を引くこともまた「殺害」として記述することができるからである。さらに、引き金を引くことの前半部分だけでも標的の死をひき起こせたとすれば、それのみを「殺害」と呼ぶことができる。これらのことは、殺害の行為のどの部分も殺害であるという「同質性」を意味するわけではないが、殺害の行為が被害者の死の惹起に関して不必要な部分を含むかぎり、その殺害行為のすくなくともある真部分はやはり殺害であるということを、意味している。

(2)原因が因果的に不必要な部分をもちうるということをとくに制限なく認めるのであれば、行為の一部がその行為の結果よりも後の時間領域を占める可能性をも認めなければならない。つまりφされた後でも、φすることの一部が持続しうるわけである。もちろんその一部とは、行為の結果に関して因果的に不必要な部分にかぎられる。他方、完遂動詞の規定［8］を遵守するなら、行為のその部分の期間において「φしている」と述べることはできない。実際たとえば、アリがすでに全滅したにもかかわらずそれらのアリを全滅させているということはありえない、と考えるのは自然である。このことは、他動的な完遂動詞の進行形を［1］の形式にあてはめるさいに何らかの限定が必要であることを示唆している。この二番目の論点は第7節でさらに具体的に扱うことにする。)

5. 未完了形のパラドックス

アリを駆除する例を図示してみよう。それは下図のように表すことができる。ひとつひとつの四角形が出来事を表し、とりわけ行為は太線の四角形で表現されている。図の左側に行くほど過去であり、太い矢印は因果関係を表す。上下の位置関係に意味はない(26)。

進行形表現がどのように適用可能であるかを、図に即して見ることにしたい。まずT_1より前の時点では、男はいかなる意味においても「庭のアリを駆除している」とは言われないだろう。その時点は、まだアリを駆除しはじめる前の時点である。だがT_1およびT_2の期間



内なら、どの時点についても「男はいまアリの駆除を行なっている」と述べることが許される。同様にT_5内のどの時点についてもそのように述べることができるだろう（駆除のやり方が原始的なのは気になるにしても）。

それとは別に、アリを駆除するという計画に従事しているという意味では、T_1からT_7までの期間内のどの時点においても「男はいまアリを駆除している」と述べることができる。第2節の議論を思い出していただきたい。その男は、おそらくT_1からT_7までの期間よりも長い期間にわたって、あるタイプの行為への傾向性をもち続ける。たとえばT_6の期間内であっても、もしアリが平然と巣に出入りしているのを見たならば、男はふたたび殺虫剤を撒くか、地面を踏みつけはじめるだろう。あるいは、誰かが殺虫剤の中和剤を撒こうとしていることに気づいたならば、T_4の期間内であっても、夕刊を取りに行くのを中断して、男は中和剤散布を阻止しようとすることだろう。

さて、殺虫剤を撒いている男が「私はいまアリを駆除している」と言ったとする。実際、人は字義どおりにそう述べることができ、またその発言が真であるとすれば、発言したその時点でそれは真としうる（偽であるならばその時点で偽としうる）。言いかえればその発言の真偽は、後にアリの全滅が生起するかどうかに左右されないのである。もしアリが全滅せず、すなわち男がアリを駆除しそこなったとしても、男はアリを駆除していなかったということにはならない。このような進行形の用法はよく知られたものである。たとえばアンスコムは前掲の『インテンション』の中で、「したとは言えないにもかかわらずしている何か」について言及している。アンスコムによれば「それがある時点で中断されたならば、彼はそれをしていた（was doing）のだがしなかった（did not do）、とわれわれは述べうる」のである[27]。

区別しなければならないのは、「アリの駆除という行為が生起した」を真にするためには、後にアリが全滅することが必要であるということである。もしアリが全滅せず、すなわち男がアリを駆除しそこなったとすれば、もちろん男はアリを駆除しなかったのである。そもそも他動的な完遂動詞（この場合の「駆除する」はそうである）は、行為の遂行以降に生起する行為の結果によって当の行為を特徴づけるような動詞なので、これはきわめて当然の事態に思われる。しかし、他動的な完遂動詞がそのように特徴づけられるものであるとすれば、前段落で述べたこととの間に齟齬が生じる。すなわち同じ「駆除する」でも進行形の場合には、なぜ、行為の結果が生起する前に、さらには生起しないかもしれないにもかかわらず、適用が可能なのか。一般的に言うなら、完遂動詞の進行形が「完遂」を必要としないように見えるのはいかなる事情によるものなのか（もちろん問題は他動的でない完遂動詞にも共有されている）。D・ドーティはこの問題を「未完了形のパラドックス（imperfective paradox）」と呼び、詳細に論じている[28]。ドーティによれば、次の［10］が［11］を含意しないことが、まさに完遂動詞であることの指標である。

[10] ジョンは円を描いていた。
[11] ジョンは円を描いた。

ドーティの指摘するとおり、[11] はジョンによって描かれたある一つの円の存在を含意するが、[10] はそうではない。だとすれば、[10] における完遂動詞の進行形の使用を可能にしているものはいったい何なのか。

ドーティの解法はいわば「可能的完遂」に訴えるものである。彼は進行形をたんに時間に関するものではなく様相的で時間的な演算子と見なし、D・ルイス流の類似性の概念を含む可能世界モデルを導入することで、未完了形のパラドックスを解決しようとする[29]。つまり [10] が真であるために必要なのは、ある仕方で規定された可能世界においてジョンが円を描いたということなのである。そしてそれならばたしかに現実世界に関する [11] が真である必要はない。

このアプローチがどれほど説得的であるかは、ひとつには、考慮すべき可能世界がどのようなものであるかに関する規定が、問題の含意関係の説明に対しどれほど有効であるかにかかっている。ただしここではドーティの議論を具体的に検討することはせず、ただ彼の可能世界の規定がパラドックスの解決にとってなお不適切なものであるという議論が存在することだけを、指摘しておきたい[30]。

すこし離れた観点から論じてみよう。ドーティは未完了形のパラドックスを完遂動詞の問題として扱っている[31]。だがその扱いはほんとうに適切なのだろうか。私の見解は、それは適切ではなく、[11] を含意しない [10] のような文における進行形の動詞はじつは完遂動詞ではない、というものである。もし [10] の「描いていた」が完遂動詞でないなら、その適用に「完遂」が必要とされないことはなんら不思議なことではない。

ドーティによる完遂動詞の特徴づけは、第3節にあげたヴェンドラーの特徴づけとは異なっている。違いを明確にするために「言及の時点」を明示することにしよう。ヴェンドラーによる完遂動詞のもともとの特徴づけは、次の [12] が [13] を含意するというものであった。

[12] ジョンはあるとき円を描いていた。
[13] ジョンがそのとき円を描いてしまっていたということはない。

ジョンがそのとき描きつつあった円をけっきょく描ききったかどうかは、たしかに [13] からは独立であるように見える。しかしもしわれわれが特定の円について語っているのなら、事情は異なる。すなわち次の [14] は、[15] のみならず [16] をも含意すると思われるのである。

[14] ジョンはあるときこの円を描いていた。

[15] ジョンはそのときにはまだこの円を描いてしまってはいなかった。

[16] ジョンはいまはもちろんこの円を描いてしまっている。

完遂動詞は、その使用が、結果や終点や結末であるような特定の出来事（たとえばこの円が描かれたという特定の出来事）の存在を含意するものとして、特徴づけられるべきであろう[32]。その特徴づけはその進行形においても一貫しているべきである。そしてそのような進行形の用法をわれわれはもっており、[14]における「描いていた」がまさしくそれである。そして、そのような真正の完遂動詞（[11]を含意しないかぎりでの[10]で用いられていたのではないようなもの）を正確に区別するため、[8]は次のように改訂されなければならない。すなわち、

[17] 「AGENTがϕする」における動詞「ϕする」が完遂動詞であるのは、ある一つの動作に関して、AGENTがϕしている最中であるということが、AGENTがその時点ではまだϕしてしまっていないということを含意し、かつ、それより後のある時点ではAGENTがすでにϕしてしまっているということを含意するときであり、そのときにかぎる。

したがって、曲線を引いているジョンに対して「いま彼は円を描いている」と述べ、もし円が完成しなかった場合にその発言が偽になるとすれば、そこにおける「描いている」は完遂動詞である。その現在進行形は、同じ動詞の未来形に置換可能である（すなわち「彼は円を描くであろう」）。だが[17]によって規定される完遂動詞には、（規定項の後半部分からあきらかなように）発話の時点で真とされたり偽とされたりすることが可能な現在進行形は存在しない。

6. 計画動詞

さて、「いま円を描いている」とある意味で正しく言われるとき、ジョンは、鉛筆やペンを手にして曲線を引いているわけであるが、その後円が完成するとはかぎらない。前節の教訓は、その「円を描いている」を完遂動詞とは区別しなければならないというものであった。こうした、未来の何らかの出来事の生起が適用のための必要条件でないような進行形の動詞を、A・C・ダントにならって「計画動詞（project verb）」と呼ぶことにしよう[33]。

計画動詞は行為の持続を表す進行形の動詞である。つまり、円を描いているとされる時点を含む時間領域において、ジョンは曲線を引くといった行為を遂行していなければならない。以降では、行為の持続を表す進行形の述語のうち計画動詞が用いられたものを、とくに「ϕしている$_{prog}$」（AGENT, TIME）と表記することにする。そうすると、[1]を機械的に適用することで、次の双条件式が得られる。

[18] 円を描いている$_{actprj}$(ジョン, いま) ⟷ (∃e)(∃t_1)(いま⊂t_1 & (∃t_2)(いま<t_2 & t_2⊂t_1) & 円を描く$_{actprj}$*(ジョン, e, t_1))

注意すべきは右辺の最後の連言肢である。「円を描く$_{actprj}$*(ジョン, e, t_1)」を、たとえば「何かをする(ジョン, e, t_1) & (∃x)(∃e')(∃t')(円である(x) & 描かれる(x, e', t')) & 意起(e, e')」のように分析することはできない。言うまでもなく、円が描かれるという出来事の生起やジョンによって描かれた円の存在を含意しないことが、計画動詞の使用の意味することだからである。[18]の右辺の最後の連言肢の「e」にあてはまるジョンの行為があるとすれば、それは彼が曲線を引くといった行為であろう。それをただちに「ジョンが円を描くという行為」と呼ぶのは適切でない。「ジョンが円を描くという行為が遂行された」という文は、「ジョンが曲線を引くという行為が遂行された」という文と異なり、「ジョンによって円が描かれた」を含意してしまうように思われるからである。右辺の最後の連言肢の述語に付けられた*印は、その述語には日常語への直接的な翻訳が存在しないかもしれない、ということを示すためのものである。

計画動詞の適用条件について、すこし脇道に逸れることになるが、述べておきたい。

ジョンが曲線を引くという行為を「円を描くつもりで為されたジョンの行為」と記述すれば、たしかに円が描かれるという出来事の生起や、ジョンによって描かれた円の存在は含意されない。しかし「円を描いている」という計画動詞を一般に「円を描くつもりで行為している」と言い換えるのは正しくない。計画動詞「いま〜している」の適用条件はじつはかなり複雑であり、すくなくとも、その適用可能性に行為者の意図や信念の有無(もしくは「濃淡」)が単純な仕方で対応するわけではないだろう[34]。たとえば、第2節の[5]の説明のさいに触れたが、ある人があることをいましているということが成立するためには、当人がそれをしようと意図し、いままさにそれをしていると信じているだけでは、十分ではない。意図したとおりにライラックを植えていると信じつつ実際にはバラを植えているジョーンズの例をダントがあげている[35]。その例は同時に、関連する意図や信念が必要でもないことを示している。つまり例のジョーンズは、バラを植えようとも、いまバラを植えているとも、思っていないのである。

計画動詞のより外的な適用条件を考えることはできないだろうか。たしかに、世間に流布した標準的なバラ栽培の規準に照らせば、ジョーンズはいかにもバラを植えているようである(そして実際にバラを植えている)。だが一般に、標準的なバラ栽培の規準に適合することをしているからといって、実際にバラを植えているとはかぎらない。たとえば穴を掘りバラの種をまいている人は、バラの植え方の実演的説明のリハーサルをしているにすぎないかもしれない。そのあと本番で使うつもりの種を取り出し、穴を埋め戻してしまったとすると、その人はバラを植えていなかったのである。また一般に、

何かをするのに非標準的なやり方があるとすれば、それをするための標準的な規準への適合はかならずしも必要とされないであろう。さらに、標準的な規準への適合と行為者の意図の連言が十分条件を構成するわけでもない。そのことは、映画の中の一シーンとして材木を削ったり瓦を運んだりしているにすぎないのであるが、自分がいま家を建てていると信じ込んでいる人のことを考えてみればあきらかである。その人は実際には家を建てていない。また、標準的な規準への適合と行為者の意図のどちらかが必要であるということも、まったく自明ではない（これはすなわち、当人が知らないうちに、きわめて非標準的なやり方で、あることをしている、と言える場合があるかどうかという問題である）。

以上の素描は、計画動詞の適用条件が単純ではないということを述べたものにすぎない。計画動詞の適用条件について積極的に論じるには稿を改める必要がある。ここでは、それらの適用をわれわれが問題なく行なっているという前提のもとで話を進めたい。重要なことはただひとつ、計画動詞が、「φしていた」の適用がφされたというより後の出来事の生起を含意しないという点で完遂動詞から区別される、ということである。

計画動詞の概念を援用することで、第2節の［6］の規定のある場合について、より踏み込んだ特徴づけを行なうことができる。すなわち傾向性用法の進行形が用いられた述語のうち、「φしている$_{dsp}$ (AGENT, いま)」の形のもので、未来への予言を含まないようなものは、次のように分析される（［6］の右辺と比較されたい）。

［19］ $(\exists e)(\exists t_1)(\exists t_2)(\text{いま}\subset t_1 \ \&\ (\exists t_3)(\text{いま}<t_3\ \&\ t_3\subset t_1)\ \&\ \varphi\text{する}$という行為への傾向性をもつ$(\text{AGENT}, e, t_1)\ \&\ t_2\subset t_1\ \&\ \sim(\text{いま}<t_2)\ \&\ \varphi\text{している}_{actcpl}(\text{AGENT}, t_2))$

この［19］には、進行形の傾向性用法と計画動詞の関係が示されている。これによって、［4］の説明で用いた「計画に従事する」という言い回しに対して、より正確な意味が与えられるであろう。そしてまたこれは、最初にあげた第二の疑問、すなわちハンバーグを食べながら「いま論文を書いている」と述べたA氏が、なぜ、論文が完成しないかもしれないにもかかわらずそのように正しく述べることができるのか、という疑問に対して解答を与える。つまり自然に解釈して、A氏が「いま論文を書いている」と述べたときには、［19］のような形式の主張がなされていたのである（論文が完成しなかった場合に遡及的に偽とされるような予言をその発言でA氏が行なっていたと解釈するならば、もちろん話は別である）。

7. 他動的な完遂動詞

他動的な完遂動詞の進行形は次のように規定される。まず、行為の持続を表す進行形の述語で完遂動詞が用いられたものを、「*actacm*」の添字を付けて表すことにする。さらに、「OBJECT」という表記を他動的動詞の対格の表記にかぎるとすると、「φしてい

$る_{actacm}$ (AGENT, OBJECT, TIME)」は、行為を表す他動的な完遂動詞の進行形表現のための述語である。さて、その述語に関して[1]を適用すれば、任意の行為者 AGENT、対象 OBJECT、時点 TIME、動詞 ϕ に関して次の双条件式が成り立つことになる。

[20] ϕ している$_{actacm}$ (AGENT, OBJECT, TIME) ⟷ $(\exists e)(\exists t_1)$
(TIME$\subset t_1$ & $(\exists t_2)$ (TIME$<t_2$ & $t_2\subset t_1$) & ϕ する$_{actacm}$
(AGENT, OBJECT, e, t_1))

次に、右辺の最後の連言肢を[9]に従って分析することで、次の[21]を得る(「遮蔽(EVENT$_1$, EVENT$_2$)」は、EVENT$_1$がEVENT$_2$をひき起こしたという関係を表す)。

[21] ϕ している$_{actacm}$ (AGENT, OBJECT, TIME) ⟷ $(\exists e_1)(\exists e_2)$
$(\exists t_1)(\exists t_2)$ (TIME$\subset t_1$ & $(\exists t_3)$ (TIME$<t_3$ & $t_3\subset t_1$) & 何
かをする (AGENT, e_1, t_1) & ϕ される (OBJECT, e_2, t_2) &
遮蔽 (e_1, e_2))

ここで第4節の最後に述べた論点を考慮しなければならない。[21]はこのままでは不適切な進行形の使用を許容してしまう。[21]の「e_1」にあたる出来事が、「e_2」にあたる出来事の惹起に関して不必要な部分を含み、かつ前者のそうした部分が後者の生起後も持続するというケースが考えられるからである。そのようなケースで「e_2」の出来事の終了以後に「ϕしている」と述べるのは適切でないと思われる。そのため「e_2」の出来事の終了以降を、「ϕしている」が適用可能な時間領域から除外する必要がある。そしてそれは[21]の右辺に連言肢をひとつ付け加えることで実現される。すなわち任意の行為者 AGENT、対象 OBJECT、時点 TIME、動詞 ϕ について、

[22] ϕ している$_{actacm}$ (AGENT, OBJECT, TIME) ⟷ $(\exists e_1)(\exists e_2)$
$(\exists t_1)(\exists t_2)$ (TIME$\subset t_1$ & $(\exists t_3)$ (TIME$<t_3$ & $t_3\subset t_1$) & 何
かをする (AGENT, e_1, t_1) & ϕ される (OBJECT, e_2, t_2) &
遮蔽 (e_1, e_2) & $(\exists t_4)$ (TIME$<t_4$ & $t_4\subset t_2$))

(「TIME$_4\subseteq$TIME$_2$」は、TIME$_4$がTIME$_2$の真部分かまたはそれと同一の時間領域であることを表す。真部分の関係にかぎらないのは、「e_2」にあたる行為の結果が文字どおり一瞬の出来事である場合に配慮したためである。)

興味深いことに他動的な完遂動詞の(真正の)過去進行形は、[22]の右辺に「TIME$<$いま」という連言肢を付け加えるだけでは規定できない。それは、他動的な完遂動詞の進行形の使用が、言及の時点(「TIME」)よりも未来の出来事の生起を含意するからである。他動的な完遂動詞の進行形を完全に過去のものとして用いることができるのは、それが適用される行為の結果(「e_2」)が終了した後である。よって付け加えるべきは「$t_2<$いま」であり、つまり次のようになる。任意の行為者 AGENT、対象 OBJECT、時点 TIME、動

詞φについて、

[23] φしている$_{actacm}$(AGENT, OBJECT, TIME) ⟷ (∃e_2)(∃e_3)
(∃t_1)(∃t_2)(TIME⊂t_1 & (∃t_3)(TIME<t_3 & t_3⊂t_1) & 何
かをする(AGENT, e_3, t_1) & φされる(OBJECT, e_3, t_2) &
意志(e_3, e_2) & (∃t_4)(TIME<t_4 & t_4⊆t_2) & t_2<いま)

[22]や[23]の形の他動的な完遂動詞の進行形の規定をふまえて、[17]の完遂動詞の規定について若干の確認しておこう。[22]や[23]は次のことを主張している。AGENTがφしている最中であるような時点(TIME)において、とにかく「e_1」にあたるAGENTの行為は終了していない([22]と[23]の右辺の第一、第二連言肢を参照)し、さらに「e_2」にあたるφされるという行為の結果も終了していない(右辺第六連言肢を参照)。これらの事柄が、[17]の規定項における未完了形表現「φしてしまっていない」の意味するところである。また[22]や[23]は、「TIME」にあたる時点よりもずっと後の時点、すなわちt_2よりも後の時点において、「e_1」と「e_2」にあたる出来事がともに終了していることを主張している。これが[17]の規定項における完了形表現「φしてしまっている」の意味するところである。ようするに他動的動詞の完了形「φしてしまった」は、φされたという出来事の完了をも意味するものでなければならない。そして完了形表現にそのような含みを読みとるのは自然である。

以上に確認された論点は、次のような反論に対処するのに役に立つ。すなわち、野矢の例において狙撃者は、ライフルを片手に救急車を待ちかまえているそのときも「狙撃者は殺害を遂行していた」のだが、救急車を待ちかまえることは不必要な部分なので(第4節の議論を思い起こされたい)、すでにそのとき殺害の行為を完了していたことになる。これは[17]のような完遂動詞の規定に反するのではないか。問題は反論者の「殺害の行為を完了していた」という言い回しである。[17]における表現に忠実であるなら、むしろ「殺してしまっていた」かどうかについて考えるべきであるが、前段落の議論を考慮すれば、狙撃者は救急車を待ちかまえている時点ではまだ標的を殺してしまっていないのである。たしかにその時点で標的の死をひき起こした行為(のまさに因果的に必要な部分)は完了していたのだが、さらに標的の死が起こらなければ、「すでに標的を殺してしまった」ことにはならない。

来ることのない救急車を待ちかまえていたときの狙撃者について「殺害の行為を遂行していた」と述べることや、あるいはアリの一匹もいない庭の北側に殺虫剤を撒いていたときの男について「駆除を行なっていた」と述べることは、誤りではないと私には思われる。ただ、因果的に不必要な作業に従事していた期間を除外する仕方で、他動的な完遂動詞の進行形の適用範囲を定めることもできる。「因果的に無駄なく」という修飾句を付けてそのような進行形を区別することにすれば、それは次のように規定される。すなわち任意の行為者AGENT、対象OBJECT、時点TIME、動詞φについて、

[24] 因果的に無駄なくϕしている$_{actacm}$(AGENT, OBJECT, TIME)
$\longleftrightarrow$ $(\exists e_1)(\exists e_2)(\exists t_1)(\exists t_2)$(TIME$\subset t_1$ & $(\exists t_3)$(TIME$<t_3$ & $t_3\subset t_1$) & 何かをする(AGENT, e_1, t_1) & ϕされる(OBJECT, e_2, t_2) & 惹起(e_1, e_2) & $(\forall e_3)$(真部分(e_3, e_1) $\rightarrow$ ～惹起(e_3, e_2)) & $(\exists t_4)$(TIME$<t_4$ & $t_4\subseteq t_2$))

右辺の第六連言肢が、行為を行為の結果の惹起にとって必要最小限のものにする（「真部分（EVENT$_1$, EVENT$_2$）」は、EVENT$_1$がEVENT$_2$の真部分であるという関係を表す）。ひょっとすると、[22]よりもこの[24]の方が、他動的な動詞のまさに他動性をよりよく表現していると考えられるかもしれない。とはいえ[24]が[22]に取って代わるわけではない。例の男にとって、アリを因果的に無駄なく駆除していたのは、庭の南側に殺虫剤を撒いていたT_2の期間にかぎられる。だがそれでも、庭の北側に殺虫剤を撒いていたときや地面を踏みつけていたときに男は（因果的には必要なかったものの）アリの駆除を行なっていたのであり、やはりそれらの行為もアリを駆除するという行為の自然な一部分を成すのである。

8. 結語

行為の生起の期間内であるかどうかが、対応する動詞の進行形が適用可能かどうかによって決まるという図式は、受け入れられやすいものであるが、素朴にすぎる。本稿では、表層的には区別されない動詞の進行形を、含意関係や論理形式の観点から、(1)傾向性用法、(2)行為の持続を表す他動的完遂動詞としての用法、(3)行為の持続を表す計画動詞としての用法の、三つの用法に区別した。それらの進行形の用法において、行為ϕすることと対応する動詞の進行形「ϕしている」との間の関係は一様でないし、また、それらのうちあるものは、その適用にさいして行為の持続さえ前提としない。

動詞の進行形の用法が本稿で提示した三つの用法に尽くされると主張するつもりは、もちろんない。また、行為者の意図や傾向性と進行形の諸用法との関係については、本稿で充分に論じることができなかった。だがすくなくとも、哲学的行為論の文脈でときおりデータとして引き合いに出される日常言語の進行形表現が、それ自体注意を要する分析対象であるということは、本稿の全体で示すことができたと思う。

注

(1) Anscombe [1957], p.41〔邦訳 pp.78-9〕. 引用箇所は私訳。
(2) Hilpinen [1997], pp.83-4.
(3) たとえば Davidson [1971]. 私はこちらの立場に強い親近感を感じる（拙論 [1993], 拙著 [1997], 第7章を参照）。
(4) たとえば Thomson [1971]. この立場が劣勢であるということはなく、ごく最近の論文としても Mackie [1997], 美濃 [1997] をあげることができる。

(5) 私自身このタイプの議論に与したことがある（拙著[1997], p.131）。

(6) 美濃[1997], p.188.

(7) *ibid.* この美濃の例ほどドラスティックではないが類似の例を、じつはJ・J・トムソンがすでに七一年の論文で自説の擁護に使っている（Thomson [1971], p.127）。また、Thomson [1977], pp.55-7の例とも比較されたい。

(8) 野矢[1999], p.65.

(9) 行為の時間的特定の問題に関して、進行形の用法の多義性に注目した啓発的な論文にHeinaman [1983]がある。ハイナマンも、食事中に「いま本を書いている（I am writing a book）」と言う例をあげており、上記の例はそれを変形したものである。彼は、進行形を「計画用法（project use）」と「行為用法（action use）」に分けているが（*ibid*, pp.384-5）、それらは本稿で私が提示する進行形の三分類のいずれともきれいには対応しない（とりわけHeinaman [1983], pp.385-6および p. 388, n.7, p.389, n.8の記述を参照）。

(10) この種の進行形表現が日本語に特有のものでないことを確認しておきたい。たとえば、「われわれはジョーンズについて、彼は一年中本を書いている（writing a book all during the year）と言うことがある。その期間中ジョーンズは、他のことはともかく、睡眠をとる。だが問題の期間中に彼が睡眠をとるという事実は、彼が本を書いているという主張を偽にすることはない」（Danto [1965], p.162 [p.197], 引用は私訳）。

(11) ある種の進行形に見られるのこの特徴もまた、日本語に特有のものではない。ふたたびA・C・ダントから引用すれば、「ラジオがけっきょく修理されなくても、男は、ラジオを修理している（be repairing the radio）と正しく言われうるのである」（Danto [1965], p.164 [p.199], 引用は私訳）。あるいは、第5節でくわしく論じるが、Anscombe [1957], p.39 [p.74]；Dowty [1979], p.133等を参照。

(12) ここで「出来事」、「過程」、「状態」といった語は、存在論的カテゴリーの分類に厳密に対応することを意図して使われていない。それらは相互排他的ではないし、それらを合わせてもカテゴリー全体を覆うようなものでないかもしれない（注（23）も見られたい）。

(13) 「AGENT」と「TIME」と「φ」について。(1)行為者（AGENT）を前提としない「滑落している」といった動詞についても、［1］のような双条件式があきらかに成り立つ。ただし本稿では簡便のためもっぱら行為のケースを考えることにしたい。(2)「TIME」は、文字どおりの時点（すなわち時間的な幅をもたない瞬間）である必要はないが、さらに、時点とは言えないほど長い期間であってもかまわない。実際にわれわれは「午後6時から午前2時までずっとビールを飲んでいた」という表現を使う（Dowty [1979], p.188, n.4によれば、同様の点は英語についても指摘できる）。ここでは具体的には示さないが、「TIME時からTIME時までずっと」という形の副詞的修飾句を伴う進行形表現についても、［1］と同様の双条件式が成り立つだろう。(3)もちろん「φ」は進行形をもつ動詞にかぎられる。

(14) 代表的な進行形の分析としては、Bennett & Partee [1972]あるいは Dowty [1979], pp.145ff を参照。もちろん、進行形をどう規定すればよいかについても異なる意見があり、たとえばB・テイラーの議論に従うなら、右辺をすこし強めなければならなくなる。テイラーによる進行形の規定はこうである（Taylor [1985], p.60）。

[25] φしている(AGENT, TIME) ⟷ ((∃t)(TIME⊂t & φする²(AGENT, t)) & ~φする²(AGENT, TIME))

最終時点を除外するための連言肢が[25]にないという点は気にしないことにして、問題は右辺の第二連言肢である。テイラーの議論は、たとえば「Rod is chuckling」が成り立つ個々の時点そのものはRod's chuckling の時間ではないという直観に依っている(*ibid*, p.59)。Rod's chuckling はより広い時間領域を占めるというわけである。だがそれは、「Rod's」が定冠詞のように機能するという英語の特徴に影響された議論であると思われる。出来事への量化を明示した[25]のヴァージョンを考えてみれば、その点は明瞭になるかもしれない(私の考えでは「Rod's chuckling」はまさに出来事の名である)。

[26] φしている(AGENT, TIME) ⟷ (∃e_1)(∃e_2)(∃t)(TIME⊂t & φする(AGENT, e_1, t) & ~φする(AGENT, e_2, TIME))

ある時間領域T_1を占める、ロッドが笑うという出来事(Rod's chuckling)があるとする。当然、T_1の真部分であるT_1^2においてロッドは笑っている。このとき、T_2を占める出来事もまたロッドが笑うという(タイプの)出来事であるということは、まったく可能であろう。したがって[26]の規定は誤りでなければならない。その状況に関して言うべきことはたんに、T_2を占めるロッドの笑い(Rod's chuckling)が、T_1を占めるロッドの笑い(Rod's chuckling)とは異なる出来事であるということにすぎない。そしてそのことを言うには[1]で十分である(もちろん同一の出来事ならば同一の時間領域を占めるという前提のもとで)。テイラーの[25]の規定のおそらく最大の利点は、「love」や「understand」といった状態動詞に進行形が存在しないことをそれによって導き出せるというものであるが(*ibid*, p.61)、日本語に目を向けた場合そうした動機は薄まるように思われる。

(15) 以上の議論は、一般に信念を傾向性の一種と見なすことの困難としてD・M・アームストロングがあげているいくつかの論点と関連している(Armstrong [1973], pp.16-21 を参照)。

(16) 野矢[1994], pp.190-2 および 野矢[1999], pp.66-7.

(17) ここで扱っている例よりも[6]は広く適用できるかもしれない。たとえばクラゲが浮いているのを見るといそいで海から出るという傾向性もまた、行為への傾向性であろう。この種の傾向性は、顕在化のための前提条件が「適当な機会だと思えば」よりは個別的であるという点で、特徴づけられる。そうした傾向性に関して[5]と同様のことが言えるだろうか(つまり[6]の規定があてはまるだろうか)。前提条件を省略しなければ、この種の傾向性を前提とした進行形の使用はそれほど不自然ではないかもしれない(「彼はクラゲを見るたびに海から出ている」)。実際、進行形のあるものは習慣や性癖を表すために使われる。

(18) Danto [1965], pp.165-6 [pp.201-2] と比較されたい。

(19) Vendler [1967], p.100.

(20) 円をひとつ描いてしまったあとで別の円を描いている、ということは可能である。だがそのケースは、「一つの動作」に関するケースではないために、[8]の規定から排除される。もちろん時間的に不連続な複数の動作の融合体を、一つの動作として考えることも可能である。だが完遂動詞「φする」から作られた「何度もφ

する」は、一般に完遂動詞ではない（円をたくさん描いている途中の時点で、すでに円をたくさん描いてしまっているかもしれない）。

(21) ヴェンドラーの比喩を借りれば「最終到達点が、過去に向かって影を投げかけ、それ以前に推移したことすべてに対してあらたな色彩を与えるのである」（Vendler [1967], p.102）。

(22) 拙書 [1997], p.67.

(23) Vendler [1967], p.100. ところでヴェンドラーによるこうした動詞の分類を、即座に、存在論的なカテゴリーの分類と見なすべきではない。たとえば「台車を押す」は活動動詞であり「十メートル台車を押す」は遂行動詞であるが、「彼女が台車を押したこと」と「彼女が十メートル台車を押したこと」は、ある一つの行為に対する二とおりの記述でありうると私には思われる。すくなくとも、そのようなことがありえないというのは自明なことではないだろう。この論点に関連する重要な指摘として、Gill [1993], pp.371-2, pp.379-2を参照されたい。

(24) 野矢 [1999], p.67. 例は論点に関わらない部分ですこし変えてある。

(25) たとえば、Taylor [1985], p.63, Verkuyl [1993], pp.199-200.

(26) 図はあくまで説明のためのものであるが、それでもいくつか注釈が必要である。まず、(1)図ではいわゆる行為の因果説が前提とされている（行為の因果説については Davidson [1963] を参照）。だが、図の第一、第二、第四の行為と第三の行為との区別そのものは、行為をひき起こす心的出来事という観念を導入しなくても可能である。それらは、「なぜ～しているのか」という形の問いに対する答えの違いによって、端的に区別されるからである。行為の因果説が受け入れられない読者は、図の左側が無いものとして読み進めてもらってかまわない。(2)行為の因果説を認めるとしても、アリを駆除しようといった意図は、T_1より前に終了することはなく、T_1以降も行為を生起させ続けていくような長期間の出来事である、と言われるかもしれない。たしかにそのように考えた方がより実情に合っているのかもしれない。だがここでは図の簡潔さを重視し、あえて図のように表記することにする。(3)「殺虫剤を庭の北半分に撒くこと」といった表現の仕方には未分析なところがある。そのような記述は、殺虫剤が庭の北半分に撒かれるという出来事が生起してはじめて可能であり、実際には噴霧器の操作といった行為がその出来事をひき起こしたのである。そして「噴霧器の操作」も同様の仕方で分析され、けっきょく太線の四角形内には特定の身体運動を表すような行為の記述が書かれることになるだろう。(4)アリを駆除しようという意図と夕刊を取りに行こうという意図は、因果的にまったく独立というわけではないかもしれない。だがそれらの間の関係は、もしあるとしても、図では省略されている。(5)すでにあきらかであろうが、本稿では「アリを駆除する」と「アリを全滅させる」を同義に用いている。つまりアリが全滅したときにのみ行為者はアリを駆除したことになる。なお、図が示すように「アリの全滅」は、最後の一匹の死という一瞬の出来事ではなく、最初の一匹の死に始まる時間的に幅のある出来事を意味する。

(27) Anscombe [1957], p.39 [p.74]. 強調は原文。

(28) Dowty [1979], pp.133ff.

(29) *ibid.*, pp.146-9.

(30) Parsons [1982], p.293; Taylor [1985], pp.64-6.

(31) Dowty [1979], p.133.

(32) ヴェンドラーは次のように述べている。「それら〔一マイル走るこ

とや手紙を書くことと〕もまた時間の中で推移するのだが、それらがまさにそれらであるために論理的に必要とされるある終点へと向かって進行するのである」(Vendler [1967], p.101, 傍点引用者)。

(33) Danto [1965], pp.159ff〔pp.194ff〕. ダントのテキストでは「計画動詞」は、歴史叙述の論理的性質を分析する文脈で「物語文(narrative sentence)」との対比で言及される。

(34) 野矢[1999], pp.75-6と比較されたい。

(35) Danto [1965], p.163〔p.198〕.

文献

Anscombe, G. E. M. [1957], *Intention*, Basil Blackwell.(『インテンション』、菅豊彦訳、産業図書、一九八四年。)

Armstrong, D.M. [1973], *Belief, Truth and Knowledge*, Cambridge U.Pr.

Bennett, M., & B.Partee [1978], *Toward the Logic of Tense and Aspect in English*, Indiana University Linguistics Culb.

Danto, A.C. [1965], *Analytical Philosophy of History*, Cambridge U.Pr.(『物語としての歴史』、河本英夫訳、国文社、一九八九年。)

Davidson, D. [1963], "Actions, Reasons, and Causes," in Davidson[1980], 3-19.

—— [1971], "Agency," in Davidson[1980], 43-61.

—— [1980], *Essays on Actions and Events*, Oxford U.Pr.(『行為と出来事』、服部裕幸・柴田正良訳、勁草書房、一九九〇年。)

Dowty, D.R. [1979], *Word Meaning and Montague Grammar*, D.Reidel Pub.

Gill, K. [1993], "On the Metaphysical Distinction between Processes and Events," *Canadian Journal of Philosophy* 23, 365-84.

Heinaman, R. [1983], "House-Cleaning and the Time of a Killing," *Philosophical Studies* 44, 381-9.

Hilpinen, R. [1997], "On States, Action, Omissions and Norms," in Holmström-Hintikka & Tuomela [1997], 83-107.

Holmström-Hintikka, G., & R.Tuomela [1997], *Contemporary Action Theory*, Vol.I, Kluwer Academic Pub.

柏端達也 [1993],「殺害の時間の問題 —— 出来事に関するD・デイヴィドソンの見解をめぐるある論争について ——」、『年報人間科学』14, 117-130.

—— [1997],『行為と出来事の存在論 —— デイヴィドソン的視点から ——』、勁草書房。

Mackie, D. [1997], "The Individuation of Actions," *The Philosophical Quarterly* 47, 38-54.

美濃正 [1997],「行為とは単に身体を動かすことにすぎないか?」、『人文研究』(大阪市立大学文学部) 49, 61-80.

野矢茂樹 [1994],「行為者性と意図」、『人文科学科紀要』(東京大学教養学部人文科学科哲学研究室) 103, 175-218.

—— [1999],「行為とできごとに関するいくつかの所見」、『哲学・科学史論叢』(東京大学教養学部哲学・科学史部会) 1, 39-78.

Parsons, T. [1982], "Review of Dowty's *Word Meaning and Montague Grammar*," *Philosophical Review* 91, 290-5.

Taylor, B. [1985], *Modes of Occurrence: Verbs, Adverbs and Events*, Basil Blackwell.

Thomson, J.J. [1971], "The Time of a Killing," *Journal of Philosophy* 68, 115-132.

—— [1977], *Acts and Other Events*, Cornell U.Pr.

Vendler, Z. [1967], *Linguistics in Philosophy*, Cornell U.Pr.
Verkuyl, H.J. [1993], *A Theory of Aspectuality: the Interaction between Temporal and Atemporal Structure*, Cambridge U.Pr.

Actions and the Progressive

Tatsuya KASHIWABATA

The following idea is apparently acceptable: whether or not a given temporal moment falls within the temporal period of *an action* can be decided by the applicability of the verb describing the action in the progressive form to that moment. This idea is, however, too simple and incorrect. The semantic relations between actions and the progressive is much more complicated than is suggested by this idea. In this paper, regarding implication relations and logical forms, I distinguish three uses of the progressive form of verbs, which are indistinguishable on the surface level. They are: (i) *disposition use*, which presupposes the existence of a dispositional state of an agent at the time of application; (ii) *transitive and accomplishment use*, which presupposes the continuance of a specific type of action; (iii) *project use*, which presupposes the continuance of a rather unspecified type of action. This distinction will give an insight into several important topics in action theory and semantics, including "the time of a killing" and "imperfective paradox".

Key Words

actions, the progressive, the time of a killing, imperfective paradox